大田南畝の読本観

—芍薬亭長根『坂東奇聞濡衣双紙』から見る—

天野　聡一

はじめに

文化六（1809）年二月、官命によって多摩川を巡視中の大田南畝は、多摩川上流域にある柴崎村にて芍薬亭長根『坂東奇聞濡衣双紙（以下、濡衣双紙）』（文化三年刊）を繙く。その読後感は以下のように記されてある。[1]

> 予平生いとまなければ、近頃流行の小説をよむにいとまあらず。六樹園（＊石川雅望）があらはせる『近江県物語』をよみて、俗流にあらざる事をしれり。去年（＊文化五年）師走の末に八幡塚村にて、『飛弾匠物語』をよみ、ことし（＊文化六年）二月廿日柴崎村にて、芍薬亭が『濡衣草紙』をよむ。例の義訓のこじつけたるには見るめもいぶせけれど、序の議論をはじめとして、一部の趣意俗流の及ところにあらず。（中略）一部の主意明かにして、『英草紙』、『繁夜話』のおもかげあり。

この評について、久保田啓一氏は、「本作（＊濡衣双紙）の趣向とそれに基づく狙い」に南畝が賛同したのではないかと推察している。[2]そこで本発表では、『濡衣双紙』の内容に立ち入り、長根が『濡衣双紙』で目指した方向性と結果としての独自性を明らかにし、それを手がかりにして南畝の読本観へ遡っていきたい。

一、長根の読本観

例えば、『出像稗史外題鑑』（文化末年頃刊）が『濡衣双紙』を「船遊びの雅談より珍事をひき出す口の禍。鳩谷義二郎が仇うちはなし」と紹介するように、[3]

本作は男主人公義二郎の敵討を主筋とする読本である。ただし、大高洋司氏が「必ずしも型通りに終始する作柄ではなく、作者独自の主張を生かす工夫の見られる点、注目に値する」とし、[4] 高木元氏が「単なる敵討ものから離れようとする工夫の跡が見られなくもない」とする[5]ように、『濡衣双紙』の独自性については、既に読本研究者によって指摘されてきた。[6] 両氏共、議論の存在に本作の特色を認めているが、議論の意義については『濡衣双紙』自序で長根自身が述べている。[7]

> 『御伽這子』の書は漢土の小説を皇国の事に摸たる鎬矢にて文体いにしへにちかく猶物語の余波あり。『繁』、『英』の二書はこれを襲間皇国の事を飜案して、古に非今に非、文章の奇絶国字小説第一といはんに論なし。『莠草』は強弩の末荒唐美を前書に紹事を不得。『新斎』、『前席』、『垣根草』の諸篇、文花降といへとも事に託て自己の識見を述、議論高にいたりては、『剪燈』の書中、子胥笵蠡を罵の流亞にして二書の美を奪に足れり。

序文前半部には、浅井了意『伽婢子』（寛文六（1666）年刊）以下七点にわたって我が国の先行作品が列挙、批評されている。長根が「国字小説第一」と絶賛するのは、『英草紙』（寛延二（1749）年刊）、『繁野話』（明和三（1766）年刊）の文章表現である。しかし、『新斎夜語』（安永四（1775）年刊）、『怪談前席夜話』（寛政二（1790）年刊）、『垣根草』（明和七（1770）年刊）に関しては、作者の知見を述べた作中の議論が優れており、その点では『英草紙』、『繁野話』の「美を奪に足れり」とまで言う。長根が最も重視したのは、作者の学識に裏付けられた作中の議論であった。長根は続いて以下のように述べている。

> ちかころ復讐の書世に行はるゝ。奇事怪話百出すといへども勧懲を主として議論を不立。竊羅氏の風韻に據。又国字小説の一変といふべし。

ここに記された「復讐の書」は、当時流行の仇討もの読本を指すと考えるのが妥当だろう。長根は、それが前代で見られた作風、具体的に言えば議論を置き去りにしていると指摘しているのである。序文の後半で長根は、本作を「勧

戒あり議論あり」と自賛する。つまり、長根が自序において提言したのは、作者の学識に裏付けられた勧戒と議論が共存する読本だった。以下、本作の勧戒と議論に注目し、それぞれがどのように関わり合っているのかについて考察していく。

二、『濡衣双紙』の勧戒

手続きとして、『濡衣双紙』の全容を窺う為にも、梗概を兼ねて本話の目録を表示しておこう。[8] 本発表に関わるストーリー上の事項は、備考欄にまとめた。

巻	回	回目	備考
一	一	名を二子に命じて終身（をひさき）を誡話 香を侍女に失ひて禍胎（わざはひのはし）を蓄話	①雪児、濡衣の香を紛失する
	二	義兒義に拠りて難を除話 奸人奸を洩して身を亡話	議論Ⅰ（亘・深谷） 義二郎、亘を討つ（→直助の仇討）
二	三	少年墻を隔て琴心を挑話 処女梯を渡て紅絲を結話	義二郎、翹子と夫婦の誓約をする 議論Ⅱ（翹子・義二郎）
	四	燕二が誇言讒に応て壮士を激話 濡衣の名香名に負て佳人を害話	②春風、讒言をする ③燕二、虚談を行う 寛一、雪児を殺し燕二を討とうとする
三	五	金創（きりきず）綻て寛一黄泉に帰話 妬心（ねたみのこゝろ）変て春風黒髪を断話	燕二、寛一を討つ（→義二郎の仇討） 春風、出家する
	六	閑居に訃音を聞て復讐を謀話 窓前に説苑を読て刺客を覚（さとる）話	直助、偽って義二郎の従者となる
四	七	継室の奸計玉を荊棘の林に埋話 浪人の僥倖金を堀兼の井に捜話	翹子、遊女屋に騙し売られる
	八	吾妻国風（わかのみち）を論て侠名を発話 義士香煙（かうのけふり）を認て薄命を歎話	翹子、名妓となる 議論Ⅲ（翹子・恕介）
五	九	雪夜騒客（みやびひと）を訪て謀を定話 花街情人（なじみ）を会（つどひ）て仇を窺話	義二郎の仇討 直助の仇討 議論Ⅳ（義二郎・直助）
	十	両尼（ふたりのあま）松岳に踪を隠話 三士（みたりのをのこ）鎌倉に家を興話	翹子、出家する 議論Ⅴ（翹子・柳葉）

注目したいのは、『濡衣双紙』の主筋、すなわち義二郎による仇討である。本章では、この仇討から本作の勧戒の在り方を探っていきたい。さて、この仇討は、燕二が義二郎の兄寛一を討ったことを発端とする。ところが、そもそも

この事件は、寛一が燕二を騙って自邸に呼び出し、討ち果たそうとしたことから起こった。つまり、燕二は自らの命を守るために寛一を殺害したに過ぎない。この点を確認するため、この辺りのストーリーをたどっておこう。

①寛一の妻・雪児は、姉妹と船遊びに出かけた際、家宝〈濡衣の香〉を紛失してしまう。寛一の「情急」な性質を思い、雪児はそのことを秘密にする。（第一回）②妾・春風の讒言によって、寛一は雪児に対し、密通の疑いを抱いていく。（第四回）③ある日、寛一が気晴らしに出掛けた庚申祭で、燕二が雪児との情交をうかがわせる話（実は、燕二は船遊び中にたまたま〈濡衣の香〉を手に入れただけであり、全くの作り話）を一座に披露。燕二はその証拠として〈濡衣の香〉をたく。（第四回）

①雪児の〈濡衣の香〉紛失、②春風の讒言、③燕二の虚談。以上の要因が重なって、寛一は雪児と燕二の密通を確信し、雪児と自らの死を招いてしまったのである。こうして見ると、敵は確かに燕二であるが、燕二の悪事に全ての原因があるわけではないことが了解されよう。そればかりか、燕二の無実性は、作中において一定の公平性が付与された登場人物によって認められるのである。すなわち、殺害現場を実見し、諸々の証言を照らし合わせた検使は、事件の概要について以下のように述べている。

事状を以ておしはかるに、侍児がいへる如く、雪児に不義なかるべし。燕二なるもの邂逅おのが船の内に其裏香紙の落たるを無根話の証左となして人前に誇たるまでにて、これ又失行の事なかるべし。（中略）寛一、事を詳に糺ば雪児を殺すに至らじ。

（第五回）

雪児は「不義なかるべし」。燕二も虚談を行っただけであって「これ又失行の事なかるべし」。検使によって非難されるのは、雪児でも燕二でもなく、事の子細を詳しく問い糺さなかった寛一であった。この見解に対して一同は、「其言の徴ありて其理の明なるに伏し、寛一が事をあやまりたるを惨ぬ。」と寛一の行為の間違いを明確に認めている。

一般に〈仇討もの〉で敵に討たれる人物は、そうなるべき因果が含まれているものである。[9] その意味で、寛一にも討たれるべき一因があったとする『濡衣双紙』の書き方は、さして特異なものではない。しかし、本作のように敵である燕二の発端部における悪行を「失行の事なかるべし」とまで断言する読本の作り方は〈仇討もの〉では異例であろう。例えば、山東京伝『復讐奇談安積沼』（享和三（1803）年刊）の轟雲平、同『優曇華物語』（文化元（1804）年刊）の大蛇太郎、曲亭馬琴『月氷奇縁』（文化二年刊）の石見太郎等々。彼等の凄まじい悪漢ぶりに比して、燕二の悪事は余りに小さく思われる。となると、そうした燕二を敵として仇を討つ義二郎の行動も、さして意味があるとは思えない。[10] そして、そうした印象は、ややもすると義二郎の善性までも脅かすものとなる。それでは、この仇討における勧善懲悪は不完全であり、破綻してしまっているのだろうか。

しかし、以上はあえて本作に一面的な読解を施したに過ぎない。我々は、長根が「奇事怪話」溢れる流行の「復讐の書」を目指していたわけではなかったということを想起すべきであろう。京伝や馬琴の読本に登場するある種超人的な悪人は、もとより長根の採る所ではなかったはずなのである。それでは、長根が意図し、作中に施した勧戒とは何だったのか。

この点を明らかにするには、寛一、義二郎、燕二の三者が、三者ともに士分であったということに留意しなければならない。寛一、義二郎、燕二の三人の士。その中でも寛一は一家の主たる人物である。先に寛一の非を難じた検使は、「寛一、士家に生れて人に討れ且児なければ、家の絶なん事力なし。」と述べ、さらに事件の顛末を聞いた義二郎は、「名の寛の字にそむき、事状を詳にせずして災害一家におよぶ」と兄の短慮を非難し、「此上は讐人燕二を討て再家名を嗣ん事は我任也」（第六回）と仇討の決意を抱くに至る。

寛一が自らの性急さを修めることが出来ず、しかも人に討たれてしまうということは、御家断絶を招く愚行に他ならなかった。そこに、本作で寛一が断罪される理由が求められよう。一方、義二郎の仇討は御家存続の為であり、また

父や兄など目上の人物に対する仇討は士道に適う。そうである限り、義二郎の仇討の正当性は、士分としての行動原理によって保証されている。義二郎の善性は動かない。こうして見ていくと、寛一と義二郎の悪性、善性は、それぞれの行動が士道に適うかどうかという基準を以て理解していくことが出来る。となると、「失行の事なかるべし」と談ぜられた燕二についても同様の観点から再考すれば、無益の虚談を行ったことにその悪性があると了解される。[11] ただし、燕二は寛一を討って逃亡した後、三つの盗み（笄、金、布）を働き、中でも金を盗んだことは、間接的に女主人公翹子の継母の死亡につながっている。燕二は女主人公翹子にとっても敵となるのである。このように、仇討の完遂に至るまでに燕二の悪性は追加されていく。

そのような中、恕介という商人が盗人（実は燕二）を懲罰する機会があったにも関わらず、「官家天に代て賞罰を行ふ。（中略）いかにぞ僕が如きものゝ 弄（もてあそぶ） ものならんや」と考え見逃した件があった（第九回）。恕介が懲罰を躊躇った理由は「官家」すなわち公をつかさどる身分では無かったという点にある。それに対応して興味深いのは、義二郎が自らの仇討を振り返った以下の台詞である。

> 此 暁（このあかつき） 討たるをりから詰問（なじりと）はんと思ひしが、盗賊（ぬすびと）を讐（あだ）として討（うた）ん事くちをしく、士（さぶらひ）の礼（れい）をもてあしらひぬ。（第十回）

義二郎は、燕二が犯した盗みを詰問しようと思ったが、盗人を仇討するのが口惜しく、「士の礼」を以て彼をあしらったと言う。燕二は、あくまで士分として士分によって懲罰されたのである。

以上のように、士道という基準を以て義二郎の仇討話を読めば、本作における勧めるべき善性が義二郎に与えられていることは、疑いない。一方、懲らすべき悪性は、まず士でありながら生来の性急さによって事件の主要因となってしまった寛一、次いで士でありながら無益な虚談を行い寛一の身の破滅を引き起こした燕二にある。

おそらく、第五回で検使に雪児、燕二の無実性を述べさせたのは、寛一の性

急さを最も強調して戒めようとしたためであったのだろう。同じ回の末尾の文ではそれをフォローするように、

寛一が火急なるより事を詳にせず、燕二が根なし言に誇り、雪児が燭を秉て夜行の嫌疑を不避、此一條の災禍を引出たる。一つの事にして三の誡ありと、其頃関の東の茶話とぞなれりける。（第五回）

と結び、寛一と燕二が誡めの対象として並列的に叙述されている。[12]

三、『濡衣双紙』の議論

前章では、本作の主筋における勧戒が士分としての規範を基軸として描かれているということを確認した。こうした勧戒の在り方は、作中の随所に施された議論とどのように関係しているのだろうか。まず、本話の議論として抽出出来る箇所を以下に揚げる。[13] 項目として、回数、議論する人物、議論の内容の三点を簡潔に記す。

第二回	議論Ⅰ（亘・深谷）	士道について
第三回	議論Ⅱ（翹子・義二郎）	君臣の道について
第八回	議論Ⅲ（翹子・恕介）	狂歌について
第九回	議論Ⅳ（義二郎・直助）	君臣の道について
第十回	議論Ⅴ（翹子・柳葉）	遊女と尼について

全てで五つの議論を掲出した。まずⅠ、Ⅳの議論について検討していこう。

Ⅰの議論は、義二郎の養母深谷に対し、石橋亘という浪人が言い寄ったのが発端となる。

僕が命にかけて思ひまゐらするをうけがひ給はざれば、僕士道立侍らず。左右平のぬし（＊深谷の夫）とうちはたしなんより外なし。（第二回）

亘は、士道を盾にして深谷への思いを遂げようとするのだが、これに対して深谷は、以下のように述べる。

うけがはざれば士道不立と聞え給ふもおぼつかなし。かく戦国打つゞきて、をゝしくいさめる事をのみ貴びぬれど、神の道・孔子の道・仏の道

の外に、又ひとつの士の道てふものありて、道ならぬ事いひ出て其事しひて遂んとし給ふ事、ことわりとも思ひ侍らず。妾此事諫てとゞまり給ひなば、既に失はんとしたる士道のすたらざるにこそ。

深谷は、道ならぬことを言い出して強引に事を運ぼうとする亘を制し、彼が失いかけた士道に回帰するよう促す。この深谷の諫言を受け、亘は退散する。なお悪計を企む亘であったが、この後、亘は事の顛末を忍び見ていた義二郎によって討たれる。彼の悪性も又寛一と同様に、士道から外れたという点に求められよう。『濡衣双紙』の勧懲の基軸は、やはり士道に適うか否かという所に存するのである。

ところで、亘には直助という家僕がいた。亘に仕えていた直助からすれば、義二郎が主君の敵ということになる。直助は偽って義二郎の従者となり、行動を共にしながら仇討の機会を窺う。そして、義二郎が燕二と刀を交わす際に、直助は義二郎に刃を向ける。義二郎は直助と燕二を続けざまに倒し、燕二には止めを差し、直助には正気を取り戻させて事の次第を聞く。これがⅣの議論に繋がるのである。旧主の仇討に拘る直助に対し、義二郎は独自の君臣論を展開することで、直助の志を士としての栄達に向けさせようとする。

汝が壮健にして義胆なる、武術を学び志気を練ば、名士とならん事、難にあらず。など志を翻て栄達をはからざる。

この後、義二郎は直助の刀をわざと肩先に受けてから、直助の刀を打ち落とし、

勝負はこれまでぞ。汝が志を感じて薄創ひとつ負たれば、古主へのいひわけ立なん。今日より心をあらためて功名を図べし。

と志ある直助が本来あるべき姿に戻り、士としての功名を遂げるよう促す。義二郎は、また直助に「心は小く志は大ならんこそよけれ」とも言うが、まさにこの台詞などは、自らの本分を弁えた上で大きな志を持って生きるべきだという考えが端的に表れている。

以上、Ⅰ、Ⅳの議論を見てきた。これまでの分析で明らかになったことは、

Ⅰ、Ⅳにおける議論が、各登場人物を本来あるべき姿に回帰するよう促す役割を担っているという点である。そして、それを逸脱した登場人物（この場合は亘）については、勧懲の論理が働く。

では、残るⅡ、Ⅲ、Ⅴの議論はどうか。この三つの議論は、全て翹子が関わっている議論である。翹子は、『濡衣双紙』の女主人公とでも言える人物で、彼女を中心とするストーリーは、義二郎と一旦は恋仲になるものの生き別れてしまうという悲恋物語を形成している。

亘を殺害した後、出奔し仮住まいをする義二郎は、隣家に住む翹子と知り合い、お互いに惹かれ合うようになる。Ⅱの議論は、義二郎が翹子と初めての逢瀬を果たす場面で行われる。すなわち、才色兼備の翹子を前にして、義二郎は「僕これまでものいはんとする女あれど、志願ある身にしあれば、ゆるし侍らず。さるを、そこの才色兼たるを見て心まどひぬ」と言うのだが、これに対して、翹子は君臣の喩えを用いて彼を諫める。この議論において、翹子は次のような発言をしている。

> 殿既に妾が為に心の守りうしなひ給ひぬ。妾は殿の容儀になづむものに非。心はみやびて小く志はをゝしくして大ならんには家をおこして城の主ともなりなん。

先に、義二郎が直助に言った「心は小く志は大ならんこそよけれ」という台詞を紹介したが、これはもともと翹子が義二郎に言った台詞であった。この議論は、女との出会いによって惰弱しかけた義二郎を士としてあるべき姿に立ち戻らせるという役割を担っていると言えるだろう。

Ⅱの議論の後、寛一殺害の報を聞いた義二郎は、仇燕二を探索する旅に出る（第六回）。しかし、それとすれ違う形で、翹子は継母の奸計によって遊女屋へ騙し売られてしまう（第七回）。Ⅲの議論は、遊女となった翹子が狂歌についての識見を客に披露するというものである。序に「国風を論にいたりては、予が生平の言を載たり」とあった通り、ここで語られる狂歌論は長根自身の持論を披露したものであろう。しかし、それはさることながら、これまでの考察

を踏まえて注目したいのは、和歌と狂歌を「良家」と「妓家」に喩えるという形で狂歌論が展開されている箇所である。

良家は朝夙に起て夜は早く寝、妓家は朝おそく起て夜は不寝。良家は言語不多不食言、妓家は言語多常食言。良家は紡績を業として誡痛飲、妓家は紡績を業とせずして痛飲を尚ぶ。良家は百年一箇の男子を守りて再び醮せざるを貴び、妓家は一夜三四の嫖客を接を栄とす。其見る処をもて論時は狂歌の詞俗体くだりたる、いかでか和歌の詞雅体の高に及ん。猶良家のの行状をもて妓家を論が如し。

妓女と良家の比較という趣向は、『英草紙』第六篇「三人の妓女趣を異にして各名を成す話」の中にある「妓女（うかれめ）」と「良家（つねのをんな）」の比較論に基づく⑭。『英草紙』における比較論は名妓のストーリーに続く枕として妓女の性質について論じたものであるが、長根はそれを自己の狂歌論に応用したわけである。さて、良家（和歌）と妓女（狂歌）の優劣について、長根は一旦良家（和歌）の優位を認めている（傍線部）。しかし、翹子の台詞は以下のように続く。

されど、良家の婦人財を貪りて節を失ひ、妬を逞して嗣を断、姪に荒て家に禍し、言を巧にして人を陥、和歌の作者相聞姦を醸し、宴に陪し献媚、名に騶利を射る、其志を論時は却て妓家と狂歌とに及ざるもありぬべし。

良家（和歌）が自らの道を踏み外した時、妓女（狂歌）の志は良家（和歌）を凌駕する（傍線部）。狂歌論を傍らに置けば、ここには本来あるべき姿を失った良家に対する批判的視点が設定されている。『濡衣双紙』の主筋である義二郎の仇討とこれまで見てきた議論では、いずれも士分の本来あるべき姿を基軸として勧戒や議論が進行していた。が、ここでは、そういった分度意識が婦人の生き方にも働いていることが分かる。

ただし、翹子が生来の妓女ではなく、あくまで良家にならんとしていた登場人物であったという点には留意しておきたい。妓女の分度を心底から肯定的に

捉えるのは、生来の妓女による議論を待たなければならない。その点が顕著になるのがⅤの議論である。

燕二の仇討が終わった後、燕二を客としていた遊女柳葉は、彼の仇を討とうと翹子の後を追う。燕二の悪行と翹子の出家を知った柳葉は仇討を諦めるが、ここで両者の生き方について議論が行われる。すなわち、翹子が柳葉にも仏門に入るよう促すのに対し、柳葉は翹子に再び遊女になるよう誘う。結局議論は平行線で終わるのだが、結果としてⅤの議論は翹子と柳葉の生き方の違いがはっきりと表れたものになっている。Ⅴの議論の終わりに翹子は、「人各志あり。妾君を仏の道に不唱、君妾を鬼の窟にな導そ」と言い、一晩同宿した後、「翌日、柳葉は西へ、春水尼（＊翹子）は東方へ立別れぬ」と結ばれるなど、各人がそれぞれの「志」を持ち、あるべき道に進む姿が描かれている。柳葉は、「其議論を聞に又一個の名妓といふべし」と讃えられるが、これは柳葉が己の本分を見出し、志を持ってその道に進んだことを評価しているのであろう。

以上、Ⅱ、Ⅲ、Ⅴの議論を見てきた。Ⅱの議論は、Ⅰ、Ⅳの議論と同じく、士分から逸脱しそうになった登場人物を、本来あるべき姿に回帰させようとするものであった。Ⅲ、Ⅴの議論は、それぞれ遊女と良家の妻、遊女と尼の比較論という形で、各々の分度を論じている。分度が問題になるのは、何も士分に限ったことではなかったのである。

四、『濡衣双紙』の典拠利用

ここまで、『濡衣双紙』における勧懲と議論が如何に関わっているのかという問題を考察してきた。結果として、己の本分を見極めた上で如何に生きるかという問題が、『濡衣双紙』の眼目である勧戒と議論に、一貫して語られているということが明らかになった。もちろん、当代の読本読者にとって、こうした問題は至極当然のものだったに違いない。己の分際を弁えて生きるというのは、近世社会を根底から支える通念だったからである。むしろ、『濡衣双紙』

の特色はそれを前面に出したところにあると言える。そして、そうした『濡衣双紙』の語りの方向性は、本作の典拠利用の方法からも窺うことが出来る。

『濡衣双紙』の典拠としては、まず西田維則訳『通俗金翹伝（以下、金翹伝）』（宝暦十三（1763）年刊）が挙げられる。[15]『金翹伝』は、本作の副筋である翹子を主人公とする悲恋物語の典拠として用いられており、自序において長根自らその存在を明らかにしている。[16] 比較のため、『金翹伝』の梗概を示す。[17]

（1）良家の娘で才色兼備の翠翹は、ある日、名妓劉淡山の霊に恋の罪業を得ることを告げられる。（2）翠翹は隣家に住む金重と婚約したものの、（3）父の危難を救うために妾として身を売り、さらに（4）遊女屋へと連行されてしまう。翠翹は自殺を図って遊女となるのを拒むが、奸計によって客をとらざるを得なくなり、閨房術を教わる。（5）翠翹は名妓となり、身請けされるが、その妻によって虐待を受ける。やがて道姑覚縁に助けられた翠翹は徐明山の妻となり、彼の力で自分に辛く当たった悪人達を次々と処刑する。明山の死後、翠翹の罪業も尽きる。（6）翠翹は金重と再会し、（7）尼となり身を潔くして一生を終える。

一方、『濡衣双紙』の対応箇所を梗概にすると、以下のようになる。

（1）良家の娘で才色兼備の翹子は、（2）隣家に住む義二郎と婚約したものの、（3）継母の病気を救うために妾として身を売る。しかし、実はそれは継母の奸計であり、翹子は（4）遊女屋へと連行されてしまう。翹子は、遊女として名を挙げることを決意し、客を取る。（5）翹子は名妓となり、翹子の志に感じた贔屓客によって貞節を守る。（6）翹子は敵を探し遊郭に訪れた義二郎と再会し、義二郎の仇討ちに協力する。仇討ちの完遂後、翹子は（7）尼となり身を潔くして一生を終える。

『濡衣双紙』は『金翹伝』から（1）～（7）の要素を借り、『金翹伝』を話型的典拠としながらも、予言という枠組み（波線部）を採らなかった。それは、登場人物の生き方に拘る『濡衣双紙』の姿勢からして、もっともなことであろう。

対照的なのは、曲亭馬琴『標注そののゆき（以下、そののゆき）』（文化四（1807）年刊）である。『そののゆき』の序文には「彼翠翹が小説にすこしく似て、その趣大に同じからず」とあり、馬琴自身によって『金翹伝』を利用したことが明かされている。その利用の詳細は徳田武氏による指摘が備わる[18]が、端的に言えば、馬琴も長根と同じく話型的典拠として『金翹伝』を利用し、女主人公薄雪の境遇を描いている。その利用箇所を梗概にすると、以下のようになる。

（1）良家の娘で才色兼備の薄雪は、（2）薄雪は園部頼胤と婚約に至るが、薄雪の前世である小野小町の霊に前世の因縁と将来の辛苦を告げられる。その後、（3）薄雪は家の為に妾として身を売り、さらに人買いによって（4）遊女屋へと連れて行かれる。

すでに見てきたように、（1）～（4）は『濡衣双紙』が『金翹伝』から借りた要素でもあったが、波線部は『濡衣双紙』が受け継がなかったもの、すなわち女主人公の境遇を決定づける因果応報の枠組である。大高洋司氏によれば、こうした超越者の予言という枠組は、当時の江戸読本では最もありふれたものであったが、むしろ『そののゆき』の特色は、薄雪の境遇が何世代も前の小町によって決定されるという時間的尺度の広い枠組を設定したところにあり、そうした読本の作り方が、山東京伝の読本とは異なるという[19]。

さて、『濡衣双紙』はその京伝の読本も典拠にしている。『復讐奇談安積沼（以下、安積沼）』である。『安積沼』は『金翹伝』とは違い、部分的・場面的典拠なので、両話の対応箇所をそれぞれ引用しよう。『安積沼』の対応箇所は、仮住まいをする山井波門と隣家の二階に住むお秋の艶話である。

一夜波門窓の下に書几をすゑ灯火かゝげつゝ、書を読て居たる折しも、何やらん机の前にはたとおちぬ。怪しと思ひつゝ取あげて見るに、釵児にくゝりつけたる物あり。頓にひらき見れば、信夫摺の絹のきれに、血をとりて書たるは、まがふべうもあらぬお秋が筆にて（中略）（＊波門は）日ごろの鉄心もとろけ、前後をかえり見ずして、いそがはしく返書をしたゝめ、

文鎮にくゝりつけて、彼楼上を的になげあげたり。（第五回）

一方、『濡衣双紙』の対応箇所は以下の通り。

（＊翹子は）一枚の短冊を金の釵にまとひて洗手盤のあたりに投落せば、石にあたりてチンと響くを、あやしび、障子ひらきて義二郎立出るに、見られじと、翹子は楼の障子ひきよせて透間より覗見る。義二郎は釵取あげ結付たるをひらき見るに、「君が宿我宿わくる燕子花うつろはぬ間に見るよしもかな」といへる伊勢がよまれたる歌を書付る。（中略）（＊義二郎は）詩を書て。狗兒の形なせる銀の書鎮に巻付て楼上に投上ぬ。（第三回）

二階に住まいする女が、ある日隣家の男主人公に懸想し、自ら釵に手紙をくくりつけて男主人公のもとへ投げる。男主人公は文鎮に返書をくくりつけて投げ返し、これによって交際する。設定や筋だけでなく、釵、文鎮など小道具までが一致している。このことは、両話の挿絵が近似しているということからも確認できる。ただし、両話には話の進行において相違点が生じている。まず、『安積沼』の男主人公・波門は、仇討ちの「大望」を担い、お秋がいくら言い寄っても全く相手にしなかったが、先に引用した文にあるように、手紙を受け取って「日ごろの鉄心もとろけ」る。一方、すでに見てきたように、「志願」ある義二郎もまた、翹子の前に「心まど」う。ここには、成すべきことがある男主人公の前に女が登場するという両話に共通の話型が窺えるのだが、女の態度がお秋と翹子では全く異なるのである。お秋の場合、

お秋はそれと見るよりも、波門にひしととりつきて、胸にかさなる日ごろの恨み、せきくる涙にあらはせり。（中略）お秋波門が手を携へ、鴛衾にいざなひて、日来の幽情花月の佳会、娯楽あげていふべからず。（第五回）

とある通り、波門との逢瀬が情味豊かに描かれるのだが、『濡衣双紙』の翹子には一切そのような場面はない。それは、さきほどの「心まど」った義二郎を誡める場面からも指摘できるが、ここでは、『金翹伝』を利用した箇所を引い

ておきたい。すなわち、

金重、情思ニ禁不住翠翹ヲ膝ノ上ニ抱キアゲ翠翹ガ臉ヲ熟視モノヲモ云ハズニ居ケレバ、翠翹、コレヲ悟リテ、「郎マタ邪念ヲオコシ玉ヘリ。妾モモトヨリ木石ニアラズ。心ナキニハアラネト、女ノ身ヲ守ルハ磁器ヲ守ルト同ジク、一タビ破ル丶寸ハ再ヒコレヲ治メガタシ。モシ妾ニ淫蕩ナル心アラバ、郎ノ御心ニハ、妾ヲ殺シ玉フトモアキタルマジ。却テ妾ニ淫蕩ナルコトヲ誨玉フハイカゞゾヤ」ト云。金重モ手モチアシク翠翹ヲ膝ヨリ下シ。「卿ガ言有理々々。吾オヨバズ。吾オヨバズ」トテ、又シバラク説話ヲナス裏ニ、ハヤ鶏ノ声キコヘ東モヤウ〳〵白ミケレバ、（第三回）

という『金翹伝』の翠翹が金重を制した場面を利用し、

義二郎、翹子が手をとりて閨に入らんとす。翹子いふ。「殿と妾天のめぐみえて容貌不醜。などか日本魂いさぎよからざらむや。今宵誓をなしまゐらするものは。宿世の縁を遂ともいふべし。媒なくして猥なる事なさんは心の問ば何とかいらへなん。いかでかたはれたる世のならはしに倣ひなんや」。義二郎、翹子が志の高きにせんすべなく。膝の上よりすべり落たるをりふし、船路が咳嗽の声におどろきて立別れぬ。（第三回）

という翹子が義二郎を制する場面を作り上げているのである。もっとも、こういった『濡衣双紙』の語り口に、『安積沼』の文章のような情味を感じることは難しいかもしれないが、結果として、『濡衣双紙』には一定の節度と格調が保たれていることに留意しておきたい。

五、南畝の読本観

さて、『濡衣双紙』を評した文化六年から遡ること二年、南畝は読本に関する感想を洩らしている。すなわち、『一話一言』所収の「読稗史有感（稗史を読みて感有り）」と題された漢詩である。南畝は、寛斎、竹渓、杏坪の三人の漢詩について「三詩ともに新奇なり。しかれども怪異にしてこの比世にもては

やせる京伝馬琴が稗史をみるがごとし。かばかりの事も時運にあづからざる事なし」と述べた後、「読稗史有感（稗史を読みて感有り）」と題された漢詩を詠む。[20] よく引かれる資料であるが、この時期の南畝の読本観を示すものとして、以下に引用する。

気象進須楽太平　気象進めばすべからく太平を楽しむべし。

近来稗史若何情　近来の稗史、情を若何とす。

儻非讎敵糢糊血　儻し、讎敵に非ずんば糢糊たる血。

尽是紅愁緑惨声　尽く是紅愁緑惨の声。

「太平を楽しむ」べき世の中であるのに、近来の読本は「情」を置き去りにしてしまい、敵討か、そうでなければ血みどろの殺害場面。読本に溢れているのは、ことごとく婦女の悲愁の声である。詩の内容は、おおよそ以上のようなところだろう。文脈から考えて、「近来稗史」とは京伝・馬琴による読本を想定したものである。南畝が嫌ったのは、〈仇討もの〉にありがちな悪人による血みどろの悪行と、その被害に遭う女性達の悲痛な声であった。この漢詩は『朝顔日記』（文化八年刊）後編の序にも流用されている。徳田武氏は、

> 文化初頭から七、八年にかけての読本は仇討物が多く、当然にその内容は殺人や婦女迫害などの凄惨な場面が多くなる。南畝はそのようなブラッディ・ストーリーをあまり好まず、むしろ太平の御世に適わしい温良和平の作品を愛したようである。才子駒沢春雄と佳人深雪のメロドラマを基調にした『朝顔日記』は、一点の殺伐の気なく、泣いたあまり盲女になるという深雪の悲嘆はあっても、楽みて淫せず、哀みて傷わず、温柔典雅なロマンである。いわば「太平ヲ楽シム」小説であり、その点を南畝は評価しているのである。

と述べており、『朝顔日記』が南畝の批判した「近来稗史」とは違った作風を有することを指摘している。[21] ところで、『朝顔日記』もまた『金翹伝』を典拠とする読本であった。別の論稿で、氏は、

> 『通俗金翹伝』の淫猥と血腥さは作者の喜ぶところではなかった。（中略）

『朝顔日記』の作者が、佳人を損傷し、淫風を宣べる場面や趣向などは一切採り入れず、作品の基調をおだやかなものに転化し、深雪の貞節を高める筆致で貫いていることは、これまで述べた梗概や引用部分からも察せられよう。

とも述べている。[22] 南畝の『朝顔日記』評については、大高洋司氏が、

南畝は、江戸の山東京伝、曲亭馬琴を中心に様式的整備の整った〈稗史もの〉の動向に飽き足らず、方向転換を望んでいた。『朝顔日記』の作者馬田柳浪は大坂の人であったが、江戸風をも良く解し、その投影はここかしこに見られるものの、本作では〈勧善懲悪〉の理念が、敵討とは全く異なるかたちで実現されている。そのことが南畝の眼鏡にかない、当時通行の〈稗史もの〉を痛烈に批判したこの詩を、あえて後編の序に掲げたのではなかろうか。

とも述べており、[23] ここで簡単にまとめることは出来ないが、少なくとも、これまで見てきたことを勘案すれば、以下のことが言えよう。すなわち、『濡衣双紙』は馬琴のように因果の枠組の中で佳人を損傷するという話型を採用せず、また『安積沼』のような男女の情愛の場面に『金翹伝』の女主人公が男主人公を制する場面を挿入することで、登場人物の生き方を描く姿勢に終始していた。そして、そういった典拠利用の仕方は、「奇事怪話百出すといへども勧懲を主として議論を不立」と当時流行の読本を批判し、勧戒と議論を取り合わせて登場人物が己の本分を生きる姿を描くという語りの方向性を打ち出した『濡衣双紙』の主意、趣向の結果である。同じく「近来稗史」に不満を洩らしていた南畝が『濡衣双紙』を「俗流の及ところにあらず」と評した所以は、こうした『濡衣双紙』の試みに対する賛同であったのではないだろうか。

おわりに

そもそも、本作を考察の対象に取り上げたのは、以下の曲亭馬琴の著名な雅文小説批判が念頭にあったからである。[24]

凡この翁達（※前文で石川雅望『飛弾匠物語』、同『都のてぶり』、四方歌垣『月宵鄙物語 』、村田春海『竺志船物語』に言及）、おのおの文つくる才は有ながら、いかにぞや、今の草紙物語を、雅語正文もて綴りては、労して功なく、且雅語正文にては、情を写してその趣を尽くすことの、得なしがたきよしを悟らで、倶に綾足の余涎を甜りしは、千慮の一失にやありけん、かへすがへすも、これらこそなきすさみにぞ有ける。

馬琴が俎上に上げたのは、石川雅望や四方歌垣であった。馬琴の雅文小説批判が余りに有名なため、今日雅文小説を説明する際にも、馬琴の発言に基づいて行いがちである。しかし、冒頭に引用した『玉川砂利』には『濡衣双紙』について「雅語をむねとして、和漢の詞をかりあつめたれ」とも述べられている。『濡衣双紙』は、当時の雅文系の読本の広がりを示してくれる作品でもあった。

さて、『濡衣双紙』刊行の二年後、長根は読本第二作となる『国字鵺物語』を世に出している。『増補外題鑑』は『国字鵺物語』を、

頼政鵺を退治して弓箭のほまれ高く、およそ鵺によつて種々の奇談を新に説れたる因果物がたり。さすがに狂歌の大人とて戯作者の及ばぬ文章。一家の雅風おのづからに視ゆる草紙なり。惜いかな。販木焼失の後、摺巻を看ことまれなり。

と評し、その文体に高い評価を与えている（傍線部）[25]。しかし、それではやはり南畝は『国字鵺物語』も称賛していたのだろうかと問うと、発表者は疑念を禁じ得ない。なぜならば、「およそ鵺によつて種々の奇談を新に説れたる因果物がたり」（波線部）とあるように、『国字鵺物語』の構成は鵺の怨霊が次々と登場人物に祟っていくという図式で成り立っており、そうした読本の作り方は、これまで見てきた『濡衣双紙』の姿勢とは程遠いからである。前章で見たとおり、南畝の読本観は、雅文体賛美というだけでは説明しきれない要素を有している。本発表で、『濡衣双紙』の内容に踏み込んで読解した所以である。

［注］

①『大田南畝全集』9（岩波書店、1987）。

②久保田啓一「読本の「俗流」と文体の問題―大田南畝の『濡衣双紙』評を手がかりとして」（『読本研究』10上、1996.11）。

③高木元『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』（ぺりかん社、1995）第一章第三節「江戸読本書目年表稿（文化期）」。

④大高洋司『京都大学蔵大惣本稀書集成　読本　二』（臨川書店、1995）「解題」。

⑤前掲高木元『江戸読本の研究―十九世紀小説様式攷―』序章「江戸読本研究序説」。

⑥さらに最近では鈴木よね子氏によって本作の「異質な面白さ」が指摘されている。鈴木よね子「『濡衣双紙』の寓意と命名法」（『近世部会誌』2、2007.12）。

⑦『濡衣双紙』本文は関西大学所蔵中村幸彦本（国文学研究資料館マイクロフィルム資料）による。

⑧各巻の章回数は論者が便宜的に付したもので、原本にないものである。また、回目の振り仮名は原則として省略したが、読解の便宜上必要と思われるものに関しては（　）内に表した。

⑨大高洋司「様式と分類」（『読本研究』9、1995.10）。

⑩前掲鈴木よね子「『濡衣双紙』の寓意と命名法」は、この点について「弟義二郎（退二）の仇討ちもよく考えれば無意味だが、それこそが主筋なのである」と述べる。

⑪燕二の虚談は、十人程の若侍による寄合で、一人ずつ好色話を披露していくという座興の中で行われた。例えば、『明君家訓』（正徳五（1715）年刊）には武士同士が寄合で無駄に騒ぐことを難じて、以下のように述べる。

> 当代、士の寄会を聞及候に、おほくは賓主ともに礼儀たゞしからず、わけもなき事共口にまかせ、声高にわらひのゝしり、又は人の噂好色のはなし、或酔狂をし、或小歌三味線座上にとりはやすやからも有之由、是等は一として士の作法にて無之候。

燕二の悪性も、やはり「士の作法」に反した点に求められるのである。

⑫雪児が責められるのは、士の妻としての分を逸脱したからである。第三章で述べる。

⑬本章で取り扱う「議論」は、登場人物同士が論を闘わせる形式を持つものに限っている。

⑭『英草紙』の引用は、新編日本古典文学全集本に拠る。引用に際し、左訓は（　）内に表した。

⑮自序には「閨秀を称ずる翠翹が行に擬」とあり、『濡衣双紙』の「閨秀」すなわち翹子が、『金翹伝』の女主人公翠翹をモデルとして造型されたことが明言されている。

⑯以下、本章で扱う『濡衣双紙』の典拠利用については、拙稿「芍薬亭長根『坂東奇聞濡衣双紙』考―『通俗金翹伝』の利用法を中心に」（『国文論叢』41、2009.3）においてより詳細に取り上げている。論の進行上、内容的に重複する箇所があるがご了承願いたい。

⑰梗概を作成するに際し、徳田武項目執筆「通俗金翹伝」（『日本古典文学大辞典』4、岩波書店、1984）を参考とした。

⑱徳田武「解題」（『馬琴中編読本集成』5、汲古書院、1996）。また、『園の雪』の本文は同書に拠った。

⑲大高洋司「京伝と馬琴―文化三、四年刊の読本における構成の差違について―」（『読本研究』3上、1989.6）。

⑳『一話一言』二十四巻「文化四年正月十六日付記事」。本文は『大田南畝全集』13（岩波書店、1987）に拠り、漢詩については訓読文を下に付した。

㉑徳田武「大田南畝メモ」（『日本随筆大成』別巻3付録、1978.10）。

㉒徳田武『日本近世小説と中国小説』（青裳堂書店、1987）「『朝顔日記』と『桃花扇』『通俗金翹伝』」。

㉓『読本【よみほん】事典―江戸の伝奇小説』（笠間書院、2008）大高洋司「カバー写真解説」。
㉔曲亭馬琴『本朝水滸伝を読并批評』（天保四（1833）年成）。本文は『曲亭遺稿』（国書刊行会、1911）に拠る。なお、馬琴の雅文体小説批判は、既に『燕石雑志』（文化八（1811）年刊）に見える。
㉕『増補外題鑑』（天保九（1838）年刊）「諸家新編稗史之部」（横山邦治編『和泉書院影印叢刊第3期49　増補外題鑑』、和泉書院、1985）。

（付記）一次資料からの引用に際し、旧字・異体字は新字・通行の字体に改め、句読点・カギ括弧・改行を適宜施した。また、引用文中の筆者による注記は、（＊）の中に表した。

＊討議要旨

大高洋司氏は、①大田南畝にとっての読本の理想とは都賀庭鐘「英草紙」「繁野話」や上田秋成「雨月物語」等の流れのものであったのか、②南畝の理想を実現するような作品を、狂歌師である長根が書いた理由は何なのか、③南畝のこうした理想は後に破れていくと自分は考えるが、発表者はどう思うのか、と訊ね、発表者は、①南畝は、新たな読本を模索した長根の姿勢そのものを評価した、②天明年間に南畝と長根は狂文会において文章制作を共にしており、そのような場で読本観を議論し影響を与え合ったと推測できる。しかし具体的な資料がないため明らかではない、③南畝は「濡衣双紙」を賞賛しているが、つづく第二作については何の言及もないため、双方の読本観に相違点があったとも考えられる、と答えた。

ロバート・キャンベル氏は、「勧戒」と「議論」を区別する様式等の基準があるのか、と訊ね、発表者は、「勧戒」は仇討話を中心に善悪がどのように分かれるのかという機軸を探り、「議論」については登場人物同士が議論する場面をすべて摘出し、共通の要素を分析したものである、と答えた。